

I 調査実施要領

1. 調査目的

医療用医薬品や製薬産業（会社）に対する患者・生活者の理解や認識の実態を把握し、医薬品や製薬産業に対する信頼感を高めるための広報活動の基礎資料とする。今回は2020年（令和2年）調査に続く第15回目の調査である。

2. 調査設計

- ①調査地域 首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）
京阪神圏（大阪府、京都府、兵庫県、奈良県）
- ②対象 満20歳以上の男女（ただし、医療関係者・製薬企業従事者等は除く）
- ③標本数 2,000人
- ④抽出方法 インターネット調査用パネルより無作為抽出
- ⑤調査方法 インターネット調査
- ⑥調査期間 2021年（令和3年）7月20日～25日
- ⑦調査機関 GMOリサーチ株式会社

※第5回調査までは訪問留置記入依頼法で調査を実施。第6回調査より調査手法をオンライン調査へ変更

3. 回収結果

	全体		首都圏		京阪神圏	
全配信数	13,658	100.0%	7,885	57.7%	5,773	42.3%
調査参加者数	3,379	24.7%	2,222	65.8%	1,157	34.2%
回収サンプル数	2,000	14.6%	1,338	66.9%	662	33.1%

※1

4. 回答者のプロフィール

①地域別

	総数	東京都区部	横浜市・川崎市	その他首都圏	大阪市	京都市・神戸市	その他京阪神圏
調査結果	2,000	17.6%	9.7%	39.7%	5.0%	5.4%	22.8%
推定母集団	45,769,559	17.6%	9.5%	39.7%	5.0%	5.4%	22.8%

※1

②性別

	総数	男性	女性
調査結果	2,000	48.8%	51.3%
推定母集団	45,769,559	48.7%	51.3%

※1

③年代別

	総数	20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上
調査結果	2,000	13.1%	15.1%	19.2%	15.6%	14.3%	22.8%
推定母集団	45,769,559	13.1%	15.0%	19.1%	15.6%	14.3%	22.8%

※1

※1 出典：「平成31年1月1日住民基本台帳年齢階級別人口 調査結果」（総務省統計局）

④職業別

総数	自営業・家族従業員(6.5%)			勤め人(47.8%)						その他(45.8%)			
	農林漁業	商工・サービス業	自由業	経営・管理職	専門技術職・教員	事務職	労務職	販売・サービス職	パート・アルバイト	専業主婦	学生	年金・恩給生活者	その他無職
2,000	0.2%	3.5%	2.9%	4.8%	5.5%	16.1%	5.0%	4.5%	12.0%	21.8%	2.1%	13.3%	8.7%

⑤家族構成別

	総数	1人住まい世帯	夫婦だけ世帯	親と子の2世代世帯	親と子と孫の3世代世帯	その他
調査結果	2,000	20.8%	29.8%	44.6%	2.8%	2.1%

5. 調査結果の見方

用語

- ・基数 実数値。グラフや数表中の()内の数値で、%値算出の際の母数。一部、「調査数」「N」「n」などで表示しているところもある。
- ・本問と付問 「本問」は、回答者全員を対象とした質問。「付問」は、本問に関連した質問で、本問の回答結果により回答する人を限定した質問。「問13-1」のように、本問の番号の後に- (ハイフン) で続けて番号が記している場合は付問であることを示す。
- ・全体 20年または19年、18年、17年、16年と表示。「本問」または「付問」の回答者全員の単純集計結果であることを示している。
- ・属性別と要因別 クロス集計における「属性別」とは、性別や年代別のように回答者の特性を表す質問(一般的にフェイスシートと呼ばれている)を分析軸(表側)にした場合の表現。「要因別」は、「属性別」以外の意識、実態質問を分析軸(表側)にした場合の表現(一般的には質問間クロスと呼ばれている)である。
- ・複数回答 質問に対し、複数の回答を認めたもので、%値の合計は100%を超えることが多い。

数値

- ・%値 基数を100%とし、原則としては小数第2位を四捨五入して小数第1位まで表示した。四捨五入していることから合計が100%にならない場合がある。また、グラフ中で数値の低いものについては数値を表記していない場合がある。また、2つ以上の選択肢の%を加える場合、実数から再算出するので、表示上の%を加算した数値と一致しないことがある。
- ・0、-、無印 %値が0、または0.05に満たなかったものを表示。

II 調査結果の要約

第1章 処方薬の情報とイメージ P21-59

* ()内は20年調査との比較

- 医療関係者から処方薬についての説明を受けた人の割合は前回より微増。
説明満足度は前回より増加。
 - ・説明実施率 95.1% (0.1ポイント増)
 - ・説明満足度 95.0% (0.5ポイント増)
- 副作用経験率は前回と変わらず、副作用関心度は低下。
 - ・副作用経験率 34.0% (増減なし)
 - ・副作用関心度 54.4% (4.2ポイント減)
- 処方薬のメーカー名の認知意向率は増加、高認知率も増加。
 - ・認知意向率 34.9% (4.6ポイント増)
 - ・高認知率 「全て知っている」+「大体知っている」⇒24.0% (0.7ポイント増)
- 入手したい処方薬情報上位は
「薬の効能・効果」「薬の副作用」「薬の飲み合わせの注意」「薬の種類・成分・特長」
医療関係者からの説明上位は
「薬の服用方法」「薬の効能・効果」「薬の種類・成分・特長」
患者側の情報ニーズとのギャップが大きいのは
「薬の副作用」「薬の飲み合わせの注意」「薬のメーカー名」「薬の保管方法」
- 医師・薬剤師以外での処方薬の情報源は「インターネット(ウェブサイト)」が圧倒的に多い。
インターネットの情報入手先は「製薬会社」と「民間の情報サイト」がメイン。
- 製薬会社の「くすり相談窓口」の認知は20.2%。利用者満足層の割合は93.2%。
 - ・認知経路 「インターネット」64.5% (認知者ベース)
 - ・利用率 10.9% (認知者ベース)
 - ・利用理由は、「くすりに関しては製薬会社が十分情報を持っている」65.9% (利用者ベース)
 - ・問い合わせ内容上位は、「効能・効果」「飲み合わせの注意」(利用者ベース)
 - ・対応満足度 「とても満足」43.2% 「まあ満足」50.0% (利用者ベース)
- 「新薬」と「ジェネリック医薬品」の認知93.3% (0.6ポイント減)
処方薬が「新薬」か「ジェネリック医薬品」かの認知 85.1% (0.9ポイント増)
 - ・選択意向 「ジェネリック医薬品」 51.5% (2.8ポイント減)
「医師・薬剤師にまかせる」 32.7% (2.0ポイント増)
「新薬」 12.6% (1.9ポイント減)
 - ・選択理由 「新薬」……………「品質」76.5% 「信頼」73.0%
「ジェネリック医薬品」…「価格」87.5%
- 処方薬への信頼層は86.0% (3.0ポイント減)
「安心」「よく効く」「信頼できる」などのイメージが定着。
 - ・処方薬のイメージ 「医師が処方してくれるので安心」89.4% (2.0ポイント減)
「市販の薬よりもよく効く」 88.6% (1.9ポイント減)
 - ・処方薬への信頼感 「そう思う」22.8% 「まあそう思う」63.2%

1. 処方薬についての説明 P21-26

◆処方薬についての説明

医師や薬剤師から処方された薬について説明を受けたのは95.1%。

「説明された」層の比率は、前回より0.1ポイント増で17年調査から僅かに増加傾向。

◆説明の内容

①「薬の服用方法」78.8% ②「薬の効能・効果」77.1% ③「薬の種類・成分・特長」70.8%

◆患者からの質問

処方された薬をもらった時に、医師や薬剤師に

「必ず質問していた」4.9% 「質問したことが多い」19.1%⇒「積極層」24.0% 前回より1.2ポイント増加。

◆患者からの質問内容

①「薬の効能・効果」56.1% ②「薬の服用方法」49.6% ③「薬の副作用」48.9%

◆患者が質問しなかった理由

①「十分説明してくれるので」45.1% ②「病院や薬局で作った説明書もらったので」38.6%

③「医師や薬剤師を信頼しているので」17.5%

◆医師・薬剤師からの説明満足度

処方された薬について、医師や薬剤師からの説明に「満足している」95.0% 前回より0.5ポイント増加。

2. 処方薬の使用実態と薬価に対する考え方 P27-34

◆医師の指示遵守度

「指示どおり飲んでる」「まあ指示どおり飲んでる」合計は98.2%で前回より0.6ポイント増加。

◆処方薬の誤使用経験

①「指示された回数どおりに飲まなかったことがある」31.2%

②「症状がよくなったので、自分の判断で服用を中止したことがある」25.0%

③「ジュースや牛乳などで飲んだことがある」19.0%

「ひとつもない」37.5%は前回と変わらず → 誤使用経験は前回と変わらず

◆処方薬の値段に対する意識

①「高いと感じたことがある」46.6% ②「妥当な値段だと感じている」26.7% ③「意識したことはない」23.1%

◆処方薬の値段への意識の理由(自由意見)

高いと感じる理由⇒①「(単に)高いから」197件 ②「ジェネリックでないから高いから」59件

③「定期的に買うから・たくさん必要だから」57件

適正な値段と感じる理由⇒①「(単に)高いと思わない・妥当だから」106件 ②「保険が適用されているから」39件

③「相場がわからない・比較できないから」35件

安いと感じる理由⇒①「保険が適用されているから」14件 ②「(単に)安いから」、「市販薬よりも安いから」、

「ジェネリックだから」各8件 ③「その他の理由」

意識したことはない理由⇒①「特になし」184件 ②「(単に)気にしていないから」74件

③「相場がわからないから」43件

◆処方薬の値段決定方法の認知

①「知らない」68.2% ②「処方される薬の値段は公的価格であり、国が決める」23.2%

③「一般用医薬品と同様、メーカーが希望小売価格を出し、販売者が決めている」8.6%

◆高額薬剤の使用について

①「患者数の少ない希少な疾患もあるので、価格だけでは何とも言えない」33.9%

②「いくら画期的な薬剤でも受け入れられない。価格を下げる努力をすべきである」28.8%

③「新薬の開発には膨大な研究開発費が掛かっているのでやむを得ない」26.1%

3. 医薬品の適正使用 P35-37

◆ポリファーマシー(多剤併用)

認知⇒「知っている」4.1% 「見聞きしたことはある」20.1% 合計認知率は24.2% 前回より2.1ポイント増加。

問題意識⇒「身近な問題として意識している」16.5% 「身近な問題とは思わない」15.4%

「知らなかったが重要な問題だと思う」41.2%

◆AMR(薬剤耐性)

認知⇒「知っている」8.1% 「見聞きしたことはある」19.9% 合計認知率は27.9% 前回より4.2ポイント増加。
問題意識⇒「身近な問題として意識している」21.2% 「身近な問題とは感じない」10.3%
「知らなかったが重要な問題だと思う」41.3%

◆残薬問題

認知⇒「知っている」13.0% 「見聞きしたことはある」24.8% 合計認知率は37.7% 前回より1.5ポイント減少。
問題意識⇒「身近な問題として意識している」30.2% 「身近な問題とは感じない」14.7%
「知らなかったが重要な問題だと思う」29.7%

4. 副作用の経験・認識 P38-40

◆副作用の経験

副作用と思われる症状を経験したことが「時々ある」「1~2度ある」合計は34.0%。前回と変わらず。
女性38.1% > 男性29.4%

◆副作用を経験した時の対応

「医師に相談したことがある」60.7% 「相談しなかった」29.6% 「薬剤師に相談したことがある」24.8%

◆副作用への関心(処方薬を飲む時に副作用について)

「非常に気にしている」11.7% 「まあ気にしている」42.6%⇒「副作用関心層」54.4% 前回より4.2ポイント減少。
女性58.8% > 男性49.4%

5. 処方薬のメーカー名の認知意向 P41-44

◆処方薬のメーカー名の認知意向

処方薬についてメーカー名を「知りたい」と思ったのは34.9% 前回より4.6ポイント増加。

◆メーカー名を知りたい理由

①「知っていると安心だから」78.8% ②「副作用が起きた時のために知っておきたいから」37.0%

◆処方薬のメーカー名の認知度

処方薬のメーカー名を
「全て知っている」3.8%+「大体知っている」20.2%⇒「高認知層」24.0% 前回より0.7ポイント増加。
「高認知層」+「多少知っている」43.8%⇒「認知層」67.8% 前回より2.1ポイント増加。

◆処方薬のメーカー名の認知経路

①「薬の包装にある製薬会社のマークで」54.4% ②「インターネットで調べて」39.7%
「高認知層」は「インターネットで調べて」「院外にある調剤薬局の薬剤師に聞いて」など、
能動的な認知経路が高い傾向。

6. 入手したい処方薬情報 P45-54

◆入手したい処方薬情報

①「薬の効能・効果」58.2% ①「薬の副作用」58.2% ③「薬の飲み合わせの注意」46.1%
患者側の入手意向より医師・薬剤師からの説明実態が大きく下回っているのは
「薬の副作用」「薬の飲み合わせの注意」「薬のメーカー名」「薬の保管方法」である。

◆医師・薬剤師以外からの処方薬の情報源

①「インターネット(ウェブサイト)」41.3% ②「テレビ、ラジオ」21.4% ③「新聞」14.2%

◆インターネットの情報入手ホームページ

①「製薬会社」49.8% ②「民間の情報サイト」49.4%

◆「くすり相談窓口」

認知は20.2% 認知経路は「インターネット」64.5% 利用率10.9%(認知者ベース)
利用者満足層93.2%(利用者ベース)
利用理由「くすりに関しては製薬会社が十分情報を持っている」65.9%
問い合わせ内容「効能・効果」54.5% 「飲み合わせの注意」52.3%

◆「新薬」と「ジェネリック医薬品」の認知

「新薬」と「ジェネリック医薬品」があることの認知は93.3% 前回より0.6ポイント減少。
服用薬について「新薬」か「ジェネリック医薬品」か「知っている」85.1%

◆「新薬」と「ジェネリック医薬品」の選択意向

「ジェネリック医薬品」51.5% > 「医師・薬剤師にまかせる」32.7% > 「新薬」12.6%

◆選択理由

「新薬」⇒「品質」76.5% 「信頼」73.0% 「ジェネリック医薬品」⇒「価格」87.5%

7. 処方薬のイメージ P55-59

◆処方薬のイメージ(同意率)

①「医師が処方してくれるので安心」89.4% ②「市販の薬よりもよく効く」88.6%

③「総合的にみて、病院や診療所(医院)で処方される薬は信頼できる」86.0%

◆処方薬の信頼感に与える要因分析 (重回帰分析)

「医師が処方してくれるので安心」「市販の薬よりもよく効く」「スイッチOTCを薬局で購入するよりも、医師に処方される薬の方が安価である」⇒処方薬の信頼を高めるのに影響大。

第2章 製薬産業のイメージと期待 P63-88

* ()内は20年調査との比較

- 製薬産業への信頼度は、前回より上昇。
製薬産業のイメージは、社会的必要性、技術力、将来性などに対する高評価を維持している。
一方で、自然環境への取り組み、消費者の声を聞く、などの評価は低イメージ。
時系列で大きな変化はないが、前回比較では全般に増加傾向。
 - ・製薬産業に対する信頼感 85.7% (1.5ポイント減)
 - ・イメージ上位
 - ・「社会的に必要性が高い産業」 92.5% (0.7ポイント減)
 - ・「技術力が高い産業」 92.5% (0.1ポイント増)
 - ・「研究開発に熱心な産業」 88.4% (1.0ポイント減)
 - ・「将来性がある産業」 87.8% (1.6ポイント減)
 - ・「高収益をあげている産業」 84.3% (2.4ポイント減)
- 製薬産業や製薬会社を知る情報源トップ3
 - ・「テレビ、ラジオのニュースや番組で」 39.2% (3.2ポイント増)
 - ・「インターネット(ウェブサイト)で」 39.1% (0.5ポイント減)
 - ・「新聞の記事で」 26.1% (2.0ポイント増)
- 製薬会社からの情報入手意向は72.4% (0.3ポイント増)
- 新薬開発について (同意率)
 - 「長い年月や莫大な費用をかけても新薬開発は必要」 91.3% (1.3ポイント減)
 - 「製薬会社は新薬開発について内容を知らせるべき」 81.4% (1.0ポイント減)
 - 「欧米等が進んでいるので、日本がやることはない」 25.1% (2.1ポイント減)
→否定74.9% (2.1ポイント増)
 - 「十分な治療薬がない疾患への治療薬を開発することは社会にとっても意義がある」 88.6% (3.9ポイント減)
 - 「資源が少ない日本にとって新薬の開発はこれからも必要である」 90.7% (1.4ポイント減)
- 新薬開発時の産学連携先への費用の支払いについて
支払についての認知率は41.4%、支払を公開していることの認知は19.7%
支払情報公開についての評価率は66.8% (「評価できる」+「ある程度評価できる」)
- 「治験」について「ある程度知っている」「治験という言葉は知っている」の双方を合わせた認知層の割合は、87.3% (0.4ポイント減)。
- 「治験」に対する考え方
 - 「新薬開発にとって必要不可欠である」 68.8% (0.2ポイント増)
 - 「開発中の薬を投与するので不安がある」 35.7% (2.1ポイント増)
 - 「医療機関や製薬会社から治験に関する情報をもっとあるとよい」 27.2% (0.3ポイント増)
 - * 「治験に関心を持っている」は 22.4% (増減なし)
- 「治験」への参加意向は30.7% (0.6ポイント増)
参加してもよいと思う理由は、「社会の役に立つ」65.4% (2.2ポイント減)、「新しい薬を試すことができる」48.1% (3.4ポイント増)。参加したくない理由は「副作用等のリスクが怖い」64.5% (21年から追加)。
- 製薬産業、製薬会社への期待点としては「よく効く・早く効く薬の開発」「新薬の開発／更なる研究開発」「安全な・副作用の少ない薬の開発」などが上位。
- どのような病気に効く薬を作ってほしいかでは、「がん」と「新型コロナウイルス感染症」に効く薬が圧倒的に多い。

1. 製薬産業のイメージ P63-70

◆製薬産業のイメージ(肯定比率)

- ①「社会的に必要な性が高い産業」92.5% ②「技術力が高い産業」92.5%
③「研究開発に熱心な産業」88.4% ④「将来性がある産業」87.8% ⑤「高収益をあげている産業」84.3%
時系列で大きな変化はない。

◆製薬産業に対する信頼感

総合的にみて製薬産業は「信頼できる」85.7% 前回より1.5ポイント減少。

◆製薬産業の信頼感形成要因分析 (重回帰分析)

◎信頼感にプラスの影響を与えている要因は

- 「企業の倫理性が高い産業」「社会的に必要な性が高い産業」「技術力が高い産業」
「経営がしっかりしている産業」「消費者の声を聞こうとしている産業」「社会貢献に熱心な産業」
「研究開発に熱心な産業」「情報を積極的に提供している産業」「将来性がある産業」
「子供を就職させたい産業」「国際化が進んでいる産業」「自然環境を守ることに熱心な産業」

▼マイナスの影響を与えている要因は、「消費者の声が届かない産業」「高収益をあげている産業」

◆信頼する理由・不信の理由(自由意見)

信頼する理由

- ①「信頼するしかない」244件 ②「なんとなく」185件 ③「社会的責任が大きい／必要だから」128件
信頼できない理由

- ①「利益優先だから」69件 ②「情報が非公開だから」52件 ③「薬害事故を起こしている」48件

◆製薬産業に対する信頼性に影響を与える要因

- ①「自分が服用している医師から処方された薬の印象」41.5%
②「製薬企業に関するニュース」28.9%

2. 製薬産業や製薬会社を知るための情報源 P71-75

◆製薬産業や製薬会社を知るための情報源

- ①「テレビ、ラジオのニュースや番組」39.2% ②「インターネット(ウェブサイト)」39.1%
③「新聞の記事」26.1%

◆製薬会社からの情報入手意向

製薬会社から薬や製薬産業に関する情報を「ぜひ入手したい」9.6% 「機会があれば入手したい」62.9%
⇒「入手意向層」72.4% 前回より0.3ポイント増加。

◆製薬会社から入手したい情報

- ①「自分が処方されている薬の情報」67.7% ②「薬についての基本的知識」53.0%
③「薬の正しい使い方」46.8% ④「新薬開発の新しい動き」34.5%
⑤「ジェネリック医薬品の情報」34.3%

時系列では「新薬開発の新しい動き」「薬価の仕組み(薬の価格について)」「流通の仕組み」は
前回調査からやや増加。

3. 新薬開発・治験についての意見、考え方 P76-86

◆新薬開発についての意見

- 「長い年月や莫大な費用をかけても新薬開発は必要」91.3%
「製薬会社は新薬開発について内容を知らせるべき」81.4%
「欧米などの方が開発の体制や技術が進んでいるので日本がやることはない」25.1%
「十分な治療薬がない疾患に対する治療薬を開発することは社会にとっても意義がある」88.6%
「資源が少ない日本にとって新薬の開発はこれからも必要である」90.7%

◆新薬開発時の産学連携に関わる費用の支払い

認知率41.4% 支払情報公開認知率19.7%
支払情報公開評価率66.8% (「評価できる」+「ある程度評価できる」)

◆治験の認知度

「ある程度知っている」41.6% 「治験という言葉は知っている」45.7%⇒「認知層」87.3%

◆ 治験の認知経路

- ①「その他Webサイト(SNS等含む)」34.4%、②「テレビ、ラジオの番組」33.4%
- ③「治験情報サイト」31.3%

◆ 治験に対する考え方

- ①「治験は新薬開発にとって必要不可欠」68.8% ②「開発中の薬を投与するので不安がある」35.7%
- ③「医療機関や製薬会社から治験に関する情報がもっとあるとよい」27.2%

◆ 治験への参加意向

「参加してもよい」30.7% (前回より0.6ポイント減少) 「参加したくない」30.6% (前回より7.7ポイント減少)

◆ 治験に参加してもよい理由／参加したくない理由

参加してもよいと思う理由

- ①「社会の役に立つ」65.4% ②「新しい薬を試すことができる」48.1% ③「次の世代のためになる」40.1%

参加したくないと思う理由

- ①「副作用等のリスクが怖い」64.5% ②「不安がある」64.0% ③「仕事・プライベートの都合で時間的余裕が無い」8.8%

4. 製薬産業や製薬会社への期待 P81-82

◆ 製薬産業や製薬会社に対して期待すること (自由意見)

- ①「よく効く薬・早く効く薬を作してほしい」594件 ②「新薬の開発／更なる研究開発」234件
- ③「安全な薬・副作用の少ない薬の開発」229件 ④「新型コロナウイルス感染症の薬・ワクチンの開発」195件
- ⑤「情報開示」173件

◆ どのような病気に効く薬を作してほしいか (自由意見)

- ①「がん」643件 ②「新型コロナウイルス感染症」323件 ③「認知症・アルツハイマー」261件 ④「難病」153件
- ⑤「風邪/インフルエンザ/ウイルス予防」60件

第3章 生活者の健康と薬・医療とのかかわり P91-99

■ 「入院」および「通院」したことがある受診経験率は、72.7% (0.8ポイント減)。

■ 処方薬の服用経験率は86.5% (0.6ポイント減)。

■ かかりつけの薬局のある人は39.4% (2.9ポイント増)。
・「おくすり手帳」を持っている人は83.1%。

■ 「患者参加型医療」に対する認知は、24.0% (0.8ポイント減)。

■ 「患者参加型医療」に必要なこと／上位5項目

「セカンドオピニオンを受けやすくする」 42.3%

「医師および薬剤師が疾患や治療法の情報を説明し患者側が選択する」 41.6%

「インフォームド・コンセントを徹底する」 38.9%

「医師、薬剤師、製薬会社が医薬品や副作用の情報を提供する」 37.9%

「診療情報を患者に開示する」 37.6%

1. 健康状態と受診経験 P91-96

◆健康状態

「健康」を自覚しているのは81.9%で、前回より0.2ポイント減少。
20代が87.4%で最も高く、60代が76.2%で最も低い。

◆受診経験

「入院」および「通院」したことがある受診経験層72.7% 前回より0.8ポイント減少。
「入院・通院とも経験」の割合は、男性70代以上が最も多い。

◆処方薬の服用経験率

服用経験率86.5% 前回より0.6ポイント減少。

◆かかりつけ薬局の有無

かかりつけの薬局があるのは39.4%で、前回より2.9ポイント増加。
年代別では70代以上が高い。

◆『おくすり手帳』の所持（20年調査新設）

『おくすり手帳』を持っているのは83.1%。
年代別では70代以上が高い。

◆利用している調剤薬局に対する要望（自由意見）

- ①「待ち時間の短縮」93件
- ②「薬剤師・局員の接客態度・知識について」41件
- ③「薬や副作用についての十分な説明が欲しい」34件
- ④「プライバシーへの配慮」23件
- ⑤「ジェネリック薬について」19件

2. 「患者参加型医療」に対する認識 P97-99

◆「患者参加型医療」の認知

「知っている」2.5% 「ある程度知っている」10.4% 「言葉は知っている」11.1%⇒認知層 24.0%
「ほとんど知らない」76.1%
年代別では70代以上が最も多い。

◆「患者参加型医療」に必要なこと

患者や家族の立場として「患者参加型医療」に必要なことに対する回答結果は、

- ①「セカンドオピニオン(診断、治療方法などについて、主治医以外の医師に意見や助言を求めること)を受けやすくする」42.3%
- ②「医師および薬剤師が疾患や治療法の情報を説明し患者側がそれを選択する」41.6%
- ③「インフォームド・コンセント(説明を受けて治療方法に合意する)を徹底する」38.9%
- ④「医師、薬剤師、製薬会社が医薬品や副作用の情報を提供する」37.9%
- ⑤「診療情報(カルテ)を患者に開示する」37.6%